

特別寄稿

カリフォルニア大学客員教授 中嶋 嶺雄

直言

支持一色の政治的判決

私は昨年からカリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授としてこちらで教鞭をとっているの

去る四月十七日早朝、一年前のロサンゼルス大暴動を招いた黒人青年ロドニー・キング氏殴打事件にたいする連邦地裁の評決がでるまでの約一週間、ロサンゼルスは、そしてアメリカ社会全体がじりじりした緊張に包まれていた。評決の週の前半、私はロサンゼルスに行っていたが、あちこちで警官の検問やパトロールに出会い、異常な雰囲気を感じていた。この同じ時期に日本の宮沢首相が訪米し、クリントン大統領との日米首脳会談が行われたはずなのに、こちらのマスメディアではほとんど報じられず、わずかながらテレビの画面に出た日米両首脳の会談場面では、宮沢首相があまりにも小さな存在に感じられた。だが、そのクリントン大統領も、アメリカ経済の再建をはじめとして、実にさまざまな問題を抱えている。なかでも黒人問題は、同大統領が大量の黒人票に支えられて当選しただけに、重大である。

ロス評決と米国の病理

人種摩擦の悩みは深刻

裁の評決は上曜の早朝という時間をあえて選んで発表されたのに、ロサンゼルスをはじめ全米各地の黒人コミュニティはその瞬間を固唾を飲んで待機していた様子がうかがわれ

だが、たまたま二女を朝早くに空港へ見送ったこともあって、土曜日だというのに十七日は朝からテレビをつけていた。万一を警戒して連邦地



人は公民権侵害で有罪、との判決が伝わった瞬間の黒人たちの歓喜の表情やその高揚ぶりが映し出される。続いて、社会正義が実現したという黒人指導者の見解、アメリカの司法制度は健全だという識者の声、評決に満足の意を表する黒人のブラッドレー・ロサンゼルス市長やクリント

る。テレビでは、CNNのヘッドライン・ニュースが、「分かれた評決(The Split Verdict)」と題して、興奮したアナウンサーの声で評決結果を伝えていた。黒人青年を不当に殴打した四人の警官のうち主犯の二

暴動以上の騒乱に陥り、やがて全米の主要都市にそれが広がったかもしれない。つかないことになったかもしれない。全米第二の大都市ロサンゼルスは、今週の「タイム」(四月十九日号)が「天使の都市は地獄へ行く？」

ン米大統領の言葉などが次々と画面を走っていた。だが、こうした評決支持一色のテレビを見ながらも、私には、これの問題解決への糸口がつかめそうだとはい底思われなかった。私は逆に、アメリカ社会の深刻なディレンマをより一層強く感じざるを得なかったのである。つまり社会の正論ないしは公論としては、いまや人種差別が世をあげて排斥されているのに、アメリカの人種問題、とくに黒人問題はますます深刻化していることを実際には否定できないからである。それゆえ、今回の評決は「政治的判決である」との声が一部に出ていたように、もしも連邦地裁が有罪判決を下さなかったら、ロサンゼルスは死者五十数人を出した昨年四月の

と題したカバー・ストーリーで詳しく分析しているように、人種摩擦の「癒えない傷」に悩んでいる。そして、かつてはアメリカン・ドリームの実る最もアメリカ的な近代都市だと言われたロサンゼルスが、今日では、次第に都市砂漠と化しつつあり、治安も極端に悪化して、リトル・トウキョウ周辺のダウンタウンをぞろぞろ歩きすることなど到底出来なくなってしまう。そしてロサンゼルスの中心部はいまやニューヨークのハレム同様の黒人社会となり、街頭にはホームレスの黒人が溢れていて、白人たちはほとんど寄りつかない。

人種的棲み分けが進む

もともとカリフォルニアは、ゴールド・ラッシュにありつこうとした中西部や一部東部からの「流れ者」の世界であり、それにメキシコから北上したラティノスたちが合流して出来あがった社会であるだけに、人種的偏見が最も少ない州であった。ところが最近のロサンゼルスに見られるように、いわゆる人種的棲み分け(Segregation)がすすみ、それは、学校や大学でもより一層目立ってきている。

このような現実にもかかわらず、今回のロサンゼルスの評決をこぞって支持せざるを得ないところに、アメリカ社会の根深い病理を見ないわけにはゆかない。【写真】去年四月の「白人警官無罪評決」への抗議で起きたロサンゼルス